

ごん げん ちょう い せき しも きた かた と ばやし だい に い せき
權現町遺跡・下北方戸林第2遺跡

平成27・令和元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書



2021

宮崎市教育委員会

ごん げん ちょう い せき しも きた かた と ばやし だい に い せき
権現町遺跡・下北方戸林第2遺跡

平成27・令和元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書

2021

宮崎市教育委員会

序 文

本書は平成27年度と令和元年度に実施された、民間開発に伴う発掘調査報告書です。

宮崎市内には約950箇所の遺跡が所在しており、旧石器時代から近世にかけての豊かな歴史的遺産が残されています。また、こうした歴史的遺産を後世に伝えるため、本市では開発事業に伴う発掘調査・保存活動に取り組んでいるところです。

今回の発掘調査では、古墳時代から近世にかけての遺構や遺物が発見され、現在住宅街となっている区域でも良好に遺跡が残存していることがあらためて明らかとなりました。本書の成果が広く市民のみなさまに活用されると幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂いた皆様に感謝申し上げると共に、今後とも本市の文化財保護行政にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年10月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

例　　言

- 本書は平成27年度と令和元年度に実施した、民間開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本発掘調査は、宮崎市教育委員会文化財課が民間事業者から依頼を受け実施した。
- 本調査に伴う文化財保護法の手続きは以下の通りである。

(権現町遺跡)

確認調査完了報告	平成27年11月11日付	宮教文第634号4
工事届（同法第93条第1項）	平成28年2月24日付	宮教文第969号1（進達）
着手報告（同法第99条第1項）	平成28年2月29日付	宮教文第969号3（伝達）
完了報告	平成28年3月14日付	宮教文第994号2
発見通知（同法第100条第1項）	平成28年3月31日付	宮教文第994号5
保管証	平成28年3月28日付	宮教文第994号3
	平成28年3月31日付	宮教文第994号6

(下北方戸林第2遺跡)

確認調査完了報告	令和元年6月28日付	宮教文第304号3
工事届（同法第93条第1項）	令和元年8月6日付	宮教文第465号1（進達）
着手報告（同法第99条第1項）	令和元年8月14日付	宮教文第465号3（伝達）
完了報告	令和元年9月24日付	宮教文第503号4
発見通知（同法第100条第1項）	令和元年10月11日付	宮教文第503号7
保管証	令和元年10月11日付	宮教文第503号6
	令和元年10月17日付	宮教文第503号9

- 現地における発掘調査、室内整理作業は以下の期間実施した。

(権現町遺跡)

発掘調査：平成28年3月8日～平成28年3月28日

整理作業：平成28年5月18日～平成29年2月28日

(下北方戸林第2遺跡)

発掘調査：令和元年9月17日～令和元年10月8日

整理作業：令和2年1月14日～令和2年3月3日

令和2年6月1日～令和2年9月11日

- 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課

(平成27年度：権現町遺跡発掘調査)

調査総括	課長	日高 貞幸
	課長補佐	小窪 裕俊
	埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主任	鳥枝 誠
庶務担当	主任	谷口 広清
調査担当	主任	金丸 武司
	嘱託員	大嶋 昭海

(平成28年度：権現町遺跡整理作業)

調査総括	課長	日高 貞幸
	課長補佐	小窪 裕俊
	埋蔵文化財係長	井田 篤
調整事務	主任	理蔵文化財係長
庶務担当	主任	井田 篤
整理担当	主任	武富 知子
	嘱託員	金丸 武司
	嘱託員	小牟田智子
	嘱託員	小野 貞子

(令和元年度：下北方戸林第2遺跡発掘・整理)

調査総括 課長 富水 英典
課長補佐 川崎 章弘
主幹兼理収文化財係長 井田 篤
調整事務 主査 稲岡 洋道
庶務担当 主事 高田 真帆
調査・整理担当 主任技師 河野 裕次
嘱託員 佐伯美佐子

(令和2年度：下北方戸林第2遺跡整理作業)

調査総括 課長 白坂 敦
課長補佐 川崎 章弘
主幹兼理収文化財係長 井田 篤
調整事務 主査 秋成 雅博
庶務担当 主事 高田 真帆
整理担当 主任技師 河野 裕次
会計年度任用職員 徳丸 理奈

(令和3年度：報告書編集作業)

調査総括 課長 白坂 敦
課長補佐 久保 陽子
主幹兼理収文化財係長 井田 篤
埋蔵文化財調査係長 秋成 雅博
調整事務 主査 石村 友規
庶務担当 主事 高田 真帆
整理担当 副主任幹 金丸 武司
主任技師 河野 裕次

6. 現地における測量はトータルステーション（遺構くんcubic）を用いて行い、個別の遺構実測図は1/20・1/10で作成した。また、個別遺構の写真撮影については6×7判モノクロ・リバーサルフィルムと35mmモノクロ・リバーサルフィルムを併用した。

7. 現地における実測は金丸、大嶋、河野が行った。

8. 権現町遺跡における自然科学分析は株古環境研究所に委託した。

9. 本書に掲載した遺物の実測及びトレースは調査員、嘱託員、整理作業員が分担して行った。

10. 本書における遺構略号は以下の通りである。

SB：掘立柱建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SH：柱穴

11. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器・須恵器 1/3、剥片石器 2/3、礫石器 1/2、鉄器 1/2であり、その他のものについては図中に示している。

12. 本書に掲載した遺物実測図の表現については、以下の通りである。

強い稜線：実線 弱い稜線：破線 被然の範囲：網掛け 磨面の範囲：矢印

調整の表現：以下の通り



ユビオサエ

タタキ

ハケメ

ミガキ

工具ナデ・ケズリ

13. 本書における土色の表記は「新版 標準土色帖」に依拠した。

14. 本書で示す方位は全て真北を示す。

15. 発掘調査により出土した遺物、及び調査における図面、写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。

16. 本書の編集は第Ⅰ部を金丸、第Ⅱ部を河野が担当した。

本文目次

第Ⅰ部 権現町遺跡	
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 基本土層	4
第2節 検出遺構	4
第Ⅳ章 総括	6
第V章 権現町遺跡における自然科学分析	7
第Ⅱ部 下北方戸林第2遺跡	
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	14
第2節 歴史的環境	14
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	17
第2節 調査の経過	17
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査成果の概要	17
第2節 基本層序	17
第3節 古墳時代の調査成果	19
第4節 近世の調査成果	21
第Ⅳ章 総括	23

挿図目次

第1図 権現町遺跡周辺遺跡分布図	2
第2図 権現町遺跡調査区位置図	3
第3図 権現町遺跡遺構分布図	3
第4図 権現町遺跡検出遺構実測図 (掘立柱建物)	4
第5図 権現町遺跡検出遺構実測図 (溝状遺構)	5
第6図 権現町遺跡出土遺物実測図	5
第7図 下北方遺跡群周辺遺跡分布図	15
第8図 下北方遺跡群	16
第9図 調査地	18
第10図 調査範囲図	18
第11図 遺構配置図	18
第12図 古墳時代後期土坑実測図	20
第13図 古墳時代後期土坑出土遺物実測図	21
第14図 掘立柱建物1実測図 出土遺物実測図	22
第15図 近世柱穴出土遺物実測図	22
第16図 土坑9実測図・出土遺物実測図	23
第17図 その他の出土遺物	23

表目次

第1表 権現町遺跡出土土器・陶磁器観察表	6
第2表 権現町遺跡出土石器観察表	6
第3表 権現町遺跡におけるテフラ分析結果	11
第4表 権現町遺跡における 植物珪酸体分析結果	11
第5表 下北方戸林第2遺跡出土土器観察表	24
第6表 下北方戸林第2遺跡出土石器観察表	24

図版目次

図版1 権現町遺跡	13
図版2 下北方戸林第2遺跡①	25
図版3 下北方戸林第2遺跡②	26
図版4 下北方戸林第2遺跡③	27

第Ⅰ部 権現町遺跡

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

県央部東側、日向灘に面した宮崎平野は、陸地の隆起により海岸線が後退しながら形成された海岸平野である。平野の東部は、沖積平野内に旧河川の流路と微高地が入り組むほか、東部は日向灘に沿って浜堤（砂丘）が連なる地形を呈している。

権現町遺跡は宮崎平野の微高地にある。この微高地は南東部が突出しており、遺跡はその突出部の付け根に立地する。

第2節 歴史的環境

弥生時代は、微高地には原ノ島遺跡が立地する。遺構は少ないが、弥生時代前期の遺物が確認されている。周囲には、新別府川対岸の宮崎平野第1砂丘に位置する橈遺跡において、宮崎平野最古段階に位置づけられる弥生土器が出土したほか、微高地と宮崎平野第1砂丘の中間にあたる低湿地に立地する浮ノ城遺跡では、弥生時代後期の遺物と共にプラントオバールが検出されたことから、水田の存在が指摘されている。

古墳時代は、砂丘及びその周辺は、古墳時代に造営された円墳が点在する。新別府川対岸の砂丘頂部に立地する江田原第3遺跡では、溝状遺構より古墳時代中期の高坏が多量に出土した。古代は、橈遺跡の南部に隣接する橈第2遺跡より綠釉陶器や内黒土器など古代の遺物と共に、火處を伴う掘立柱建物や溝状遺構が検出されている。

中世の遺跡としては、宮崎平野第1砂丘上より大規模な溝が検出された麓第3遺跡が存在する。新別府川北岸の砂丘間低地にあたる池開・江口遺跡は、多くの溝や掘立柱建物、井戸が検出され、青磁や染付などの貿易陶磁が中世土師器や四ツ目土錐などの漁具と共に出土し、15世紀代における中産階級の居館と推定している。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

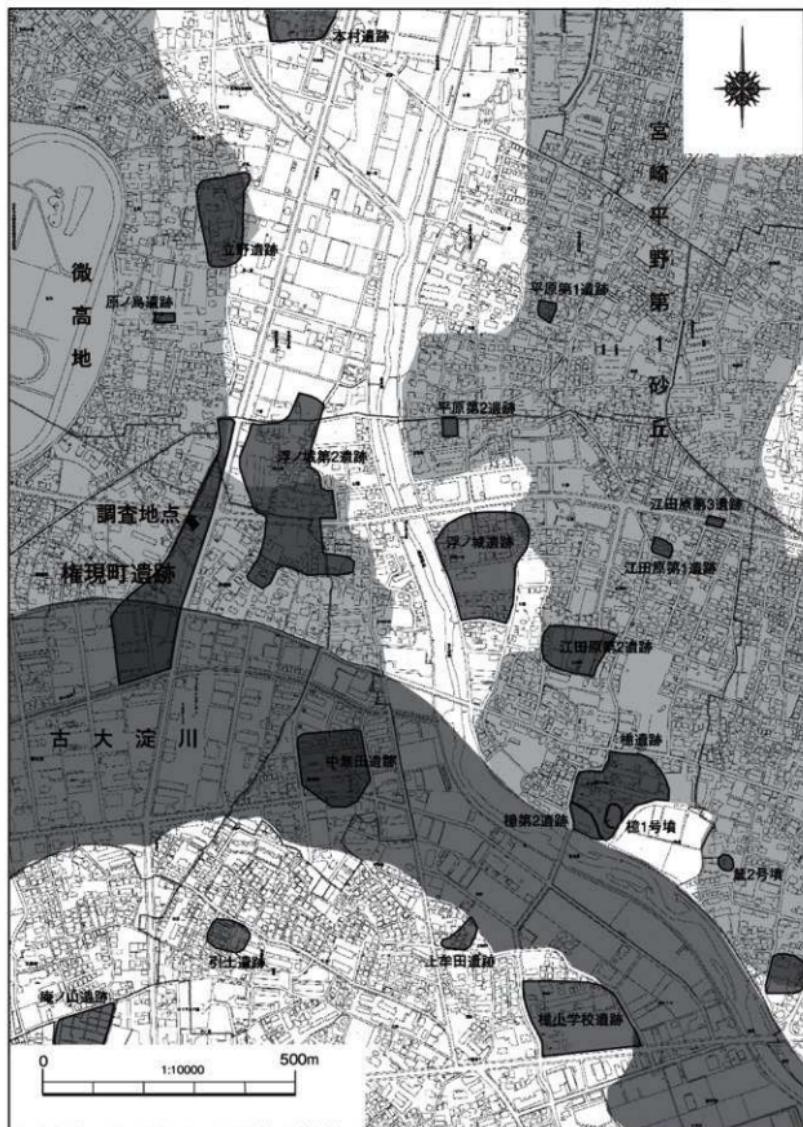
第1節 調査に至る経緯

平成26年10月、土地所有者より共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「権現町遺跡」の域内に当たることから、平成26年10月17日に確認調査を実施した。その結果、4箇所設定したトレンチのうち2箇所において地表面下30~40cmで溝、ピットなどの埋蔵文化財を確認した。

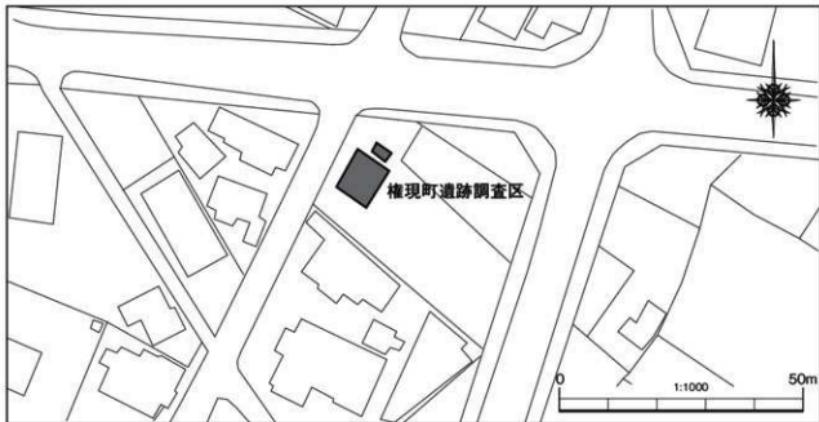
この結果を受けて土地所有者と協議を実施した結果、共同住宅の基礎工が埋蔵文化財に及ぼす影響を免れることから、本発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

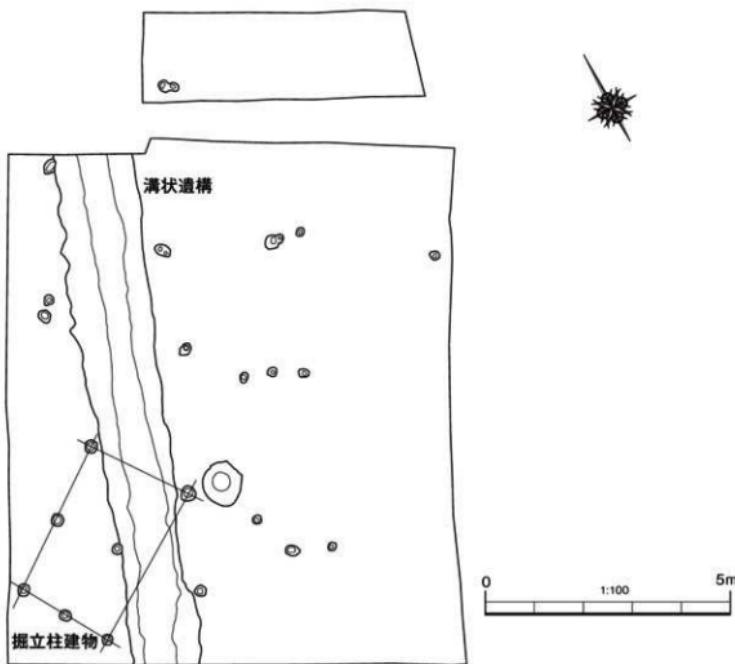
調査は、バックホウにて表土を剥いた後、人力にて遺構検出を行った。その結果、黄褐色砂質土層の面にて溝やピットなどの遺構を確認した。溝の埋土中に砂粒状の火山灰が認められたため分析を行った。発掘調査は平成28年3月8日より始まり、3月28日に終了した。



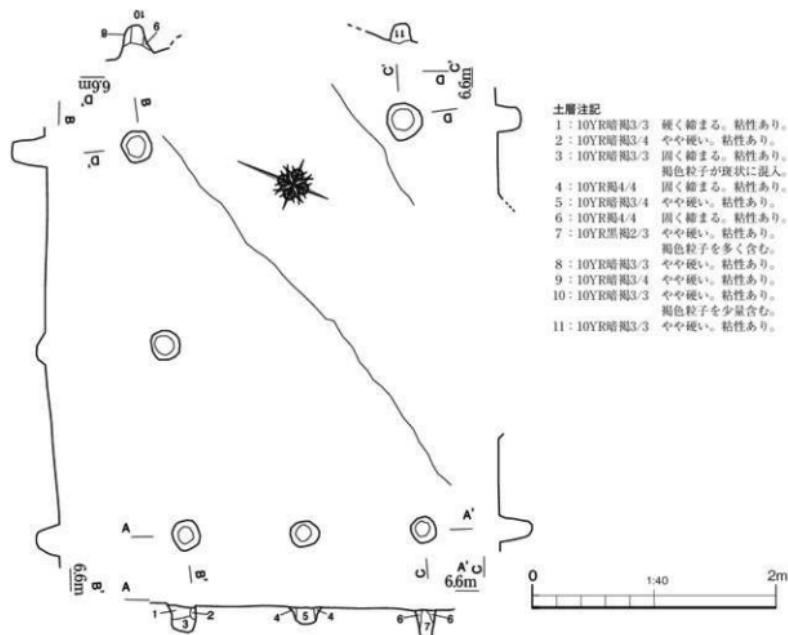
第1図 権現町遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/10000)



第2図 権現町遺跡調査区位置図 (S = 1/1000)



第3図 権現町遺跡遺構分布図 (S = 1/100)



第4図 権現町遺跡検出遺構実測図（掘立柱建物・S=1/40）

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本土層

今回調査区では、現地表面下に表土があり、その下層に遺構検出面である黄褐色の細粒砂質土が認められた。この砂質土は宮崎平野一帯の微高地上に認められる層と同一である。更にこの40~50cm下層には粗粒の灰褐色砂質土へ変化し、更に粗粒の青灰色砂質土へと至る。

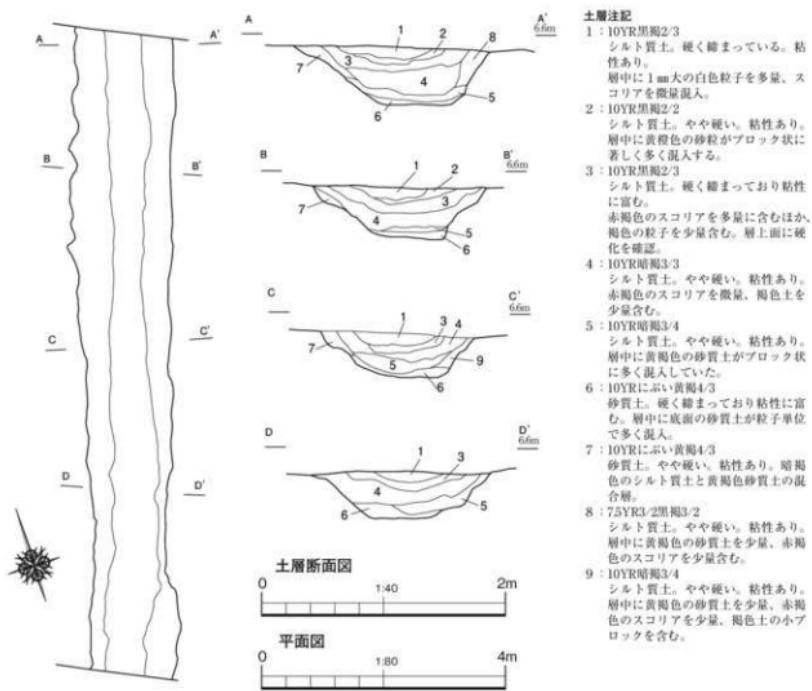
なお、遺構は黄褐色砂質土層の上面で検出された。

第2節 検出遺構

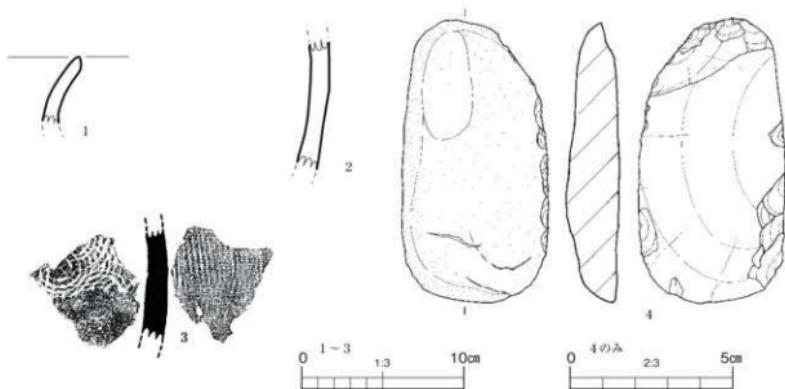
検出面が地表面から浅いため、近世以降の影響も多く見受けられた。その中で、検出遺構としては掘立柱建物、溝状遺構、ピットを検出した。

掘立柱建物

調査区内からは20基を越えるピットが確認されたが、調査区南西部において比較的規則的な配置が認められたため掘立柱建物と認定した。構造は確認できる範囲では2間×2間であり、南北方向は1m間隔、東西方向は1.5mの間隔である。南東部は溝の対岸に柱穴が1基存在するが、その場合やや歪な構造となる。溝の構築時に、本来なら掘立柱建物に伴っていた柱穴が破壊された可能性も考えられる。柱穴の断面を観察すると、垂直に下るような土層断面を呈し



第5図 権現町遺跡検出遺構実測図（溝状遺構）(1/40, 1/80)



第6図 権現町遺跡出土遺物実測図（土器 1/3、石器 2/3）

ており、柱痕の可能性が考えられる。柱穴の埋土中に遺物は確認されなかったが、柱穴と溝が近接する地点においては、溝状遺構が柱穴を切っていたことから、建物は溝状遺構の構築前に存在したと考えられる。

溝状遺構

調査区西側より検出された。遺構は幅約80cm、深さ約60cmであり、南北方向から約10°西に傾く方向に伸びている。断面はU字状を呈していた。断面を観察すると、溝の埋土は黒褐色～暗褐色のシルト質土が主体となるが、2層と6層（附編では7層）は黄褐色砂質土を多く含んでいた。このほか3層上面は硬化していた。

2, 3は遺構からの出土遺物である。2は埋土中位（3～5層）からの出土遺物である。中世に相当する。3は6層からの出土遺物である。

第Ⅳ章 総括

検出された溝状遺構の埋土を分析した結果、6層（第V章では7層）は霧島高原スコリア（1235年降灰）、2層は桜島文明軽石（1471年降灰）であった。6層から古代の須恵器が出土し、3～5層から中世の陶器が出土したこととそれを裏付けている。よってこの遺構は古代に構築され、直後に霧島高原スコリアの降灰により僅かに埋没したものの、200年以上の間、窪みを維持しながら徐々に埋没し、桜島文明軽石により大きく埋没したと考えられる。埋土中に見られる硬化も、この遺構が道として使用された事を示している。埋土からはスキヤやネザサなど、日当たりがよく定期的に手入れされる環境で繁茂する植物の珪酸体が多く認められるが、これは道として 使用するにあたって、定期的な刈取りや火入れ等の管理が行われたことを示している。

現在、調査区の東側には、宮崎平野を南北に横断する市道大島通線が存在する。1988年の開通前は、調査区の西に隣接する道がその役割を担っていたことが、明治期の地図から確認することができる。今回調査された溝状遺構（道）は、この道の数百年前の姿である可能性が考えられる。

第1表 権現町遺跡出土土器・陶磁器観察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	種類	器種	部位	焼成	調整		胎土	備考
							外面	内面		
1	—	—	土師器	甕	口縁部	良好	丁寧なナデ	不明	小石：多	
2	溝状遺構	1	陶器	甕	胴部	良好	丁寧なナデ	丁寧なナデ	白色粒子：少	
3	溝状遺構	6	須恵器	甕	胴部	良好	溝状叩き目 →横位崩毛目	ナデ？		

第2表 権現町遺跡出土石器観察表

遺物番号	出土遺構	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
4	溝状遺構	1	二次加工剥片	頁岩	11.4	6.1	1.9	200	

株式会社 古環境研究所

第1項 自然科学分析の概要

権現町遺跡の発掘調査では、道路跡等の可能性が考えられる溝状遺構（SE1）が検出された。ここでは、同遺構の年代や性格および当時の周囲の植生や環境を把握する目的で、テフラ分析および植物珪酸体（プラント・オーバル）分析を行った。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

第2項 テフラ（火山灰）分析

1. はじめに

テフラ（火山灰）層の岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスと斜方輝石の屈折率）を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、テフラの岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス（町田・新井、2003）を参照した。

2. 試 料

分析試料は、溝状遺構（SE1）のA地点において、埋土の上部と底部から採取されたNo.2およびNo.7の計2点である。写真図版に試料採取箇所を示す。

3. 分析方法

（1）前処理

湿式用の篩（2～4φ）を用いて、水洗しながら各粒径ごとに篩分けを行った。2～3φ（0.250～0.125mm）と3～4φ（0.125～0.063mm）の粒子について超音波洗浄を行い、そのテフラ粒子を分析対象とした。

（2）重軽鉱物組成

テトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離を行い、重鉱物と火山ガラスを含む軽鉱物のフラクションに区分した。分離後、重鉱物に含まれる磁性鉱物を磁石で取り除き、磁性鉱物と残った重鉱物をそれぞれ秤量した。残った重鉱物粒子についてレーキサイドセメントで封入してプレパラートを作成し、100倍の偏光顕微鏡下で重鉱物の鑑定を行った。

（3）火山ガラスの形態分類

火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さ、気泡の形状などを指標にして定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A'型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B型：平板状であるが、火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C型：A、A'型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まってきた火山ガラス

D型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の平行した稜を持つ火山ガラス

E型：D型よりも管が細長く纖維を束ねた形状を示す火山ガラス

F型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

(4) 火山ガラスと斑晶鉱物の屈折率測定

テフラに含まれる火山ガラスと斜方輝石について、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質製、MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行った。火山ガラスについては3～4φ(0.125～0.063mm)の粒子、斜方輝石については2～3φ(0.250～0.125mm)の粒子を粉碎したもの測定に用いた。

4. 分析結果

テフラの岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスと斜方輝石の屈折率）を表1および図1に示す。図1の左端上部には、今回の分析で候補となる指標テフラについて火山ガラスの屈折率(nl)と斜方輝石の屈折率(γ)の範囲を示した。以下に、各試料ごとにテフラの特徴を記載する。

(1) №2

№2の鉱物組成は、軽鉱物86.0%、重鉱物6.3%、磁性鉱物7.7%である。重鉱物組成は斜方輝石が55.4%、単斜輝石が22.7%などである。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は73.9%で、火山ガラスの形態は、A型のバブルウォールタイプが7.8%、C型が46.9%、D型が7.2%、E型が12.1%である。火山ガラスの屈折率(nl)は1.5104-1.5153、斜方輝石の屈折率(γ)は1.7091-1.7138である。

(2) №7

№7の鉱物組成は、軽鉱物83.5%、重鉱物13.1%、磁性鉱物3.4%である。重鉱物組成は斜方輝石が66.0%、単斜輝石が19.8%、カンラン石が4.3%などである。軽鉱物中に含まれる火山ガラスの含有率は3.9%で、火山ガラスの形態は、A型およびA型のバブルウォールタイプが2.6%、C型が0.7%などである。火山ガラスの屈折率(nl)は1.4976-1.4999、斜方輝石の屈折率(γ)は1.7012-1.7035である。

5. 考察

テフラの岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスと斜方輝石の屈折率）、顕微鏡観察の所見、および土層の堆積状況などから、№2には桜島文明軽石(Sz-3、1471年)に由来するテフラ粒子が含まれていると考えられる。また、№7には霧島高原スコリア(Kr-Th、1235年)および姶良Tn火成岩(AT、約29万年前)に由来するテフラ粒子が含まれていると考えられる。

《参考文献》

- 遠藤邦彦・鈴木正章1980 「立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』No13
- 町田 洋・新井房夫1976 「広域に分布する火山灰-姶良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』46。
- 町田 洋・新井房夫1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰」『第四紀研究』
- 町田 洋・新井房夫2003 「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-」東京大学出版会
- 吉川周作1976 「大阪層群火山灰層について」『地質学雑誌』82

第3項 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

2. 試料

分析試料は、溝状遺構(SE 1)のA地点とB地点において、埋土の各層準から採取された計6点である。

写真図版および分析結果図に試料採取箇所を示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケア科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

（1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

- 〔イネ科〕 イネ、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）
 〔イネ科－タケア科〕 メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等
 〔イネ科－その他〕 表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等
 〔樹木〕 その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1) A地点

溝状構造の基底（No.8）では、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。埋土底部（No.5、7）では、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型が増加し、イネ、シバ属型、樹木（その他）などが出現している。イネの密度は600～700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。Sz-S直下（No.3）では、メダケ節型、ネザサ節型が増加している。イネの密度は1,300個/gと低い値である。埋土上部（No.1）では、ススキ属型が増加し、ムギ類（穂の表皮細胞）、マダケ属型が出現している。イネの密度は1,900個/gと比較的低い値である。ムギ類（穂の表皮細胞）の密度は1,300個/gと低い値であるが、穂（穂殼）が栽培地付近に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、おむねススキ属型およびネザサ節型が優勢となっている。

2) B地点

溝状遺構の底部(№9)では、スキ属型、ウシクサ族Aが多く検出され、キビ族型、メダケ節型、ネザサ節型、樹木(その他)なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、スキ属型が優勢となっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

溝状遺構(SE1)の埋土から採取された試料について植物珪酸体分析を行った。その結果、埋土底部の霧島高原スコリア(Kr-Th. 1235年)混層から桜島文明軽石(Sz-3. 1471年)直下層までの堆積当時は、遺構周辺はスキ属やチガヤ属、メダケ属(おもにネザサ節)をはじめ、シバ属なども生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布してたと推定される。

また、当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。なお、ここで検出されたイネについては、周辺で利用された稻藁に由来する可能性も考えられる。稻藁の利用としては、敷き藁や堆肥、建物の屋根材や壁材、藁製品(俵、縄、ムシロ、草履など)および燃料など多様な用途が想定される。

スキ属やチガヤ属、メダケ属(ネザサ節)などのイネ科植物は、日当たりの悪い林床では生育が困難であり、スキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ(焼き払い)が必要である(堀田, 1991, 近藤, 1995)。このことから、当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また、このような草原的な植生環境下で土壤中に多量の有機物が供給され、炭素含量の高い黒色土壤(黒ボク土)が形成されたと推定される(杉山ほか, 2002)。

その後、桜島文明軽石(Sz-3. 1471年)より上位層の時期には、稲作に加えてムギ類の栽培も行われるようになり、マダケ属も見られるようになったと考えられる。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

《参考文献》

- 杉山真二・藤原宏志1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19
- 杉山真二2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社
- 杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里2002 「最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史」『第四紀研究』41
- 杉山真二2009 「植物珪酸体と古生態、人と植物の関わりあい④、大地と森の中で－縄文時代の古生態系－」『縄文の考古学Ⅲ』小杉康ほか編、同成社
- 藤原宏志1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9
- 藤原宏志・杉山真二1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17

第3表 権現町遺跡におけるテフラ分析結果

サンプル名		No.2	No.7
試料番号	(g)	0.1252	0.2602
重鉱物組成	(個)	0.1003	0.2145
重鉱物組成	(個)	0.0073	0.0356
組成割合	(%)	0.0990	0.0087
回収重量合計		0.1166	0.2568
斜方輝石	144	167	
普通角閃石	59	50	
黒雲母	0	1	
カランソン石	0	0	
不明およびその他の	55 ⁺	24	
合計	260	253	
火山ガラス(側)	227	12	
火山ガラス(側)	80	293	
△型	0	1	
△型	24	7	
B型	0	0	
C型	144	2	
D型	22	1	
E型	37	0	
手型	0	1	
重液分離後の鉱物(重鉱%)			
軽鉱物の合計率(重鉱%)	90.25	98.69	
重鉱物の合計率(重鉱%)	86.02	83.53	
軽鉱物の合計率(重鉱%)	6.26	13.08	
重鉱物の合計率(重鉱%)	7.72	3.39	
合計	100.00	100.00	
斜方輝石	55.38	66.01	
普通角閃石	22.76	29.76	
黒雲母	0.00	0.40	
カランソン石	0.00	0.00	
不明およびその他の	21.92	4.35	
合計	100.00	100.00	
△型	0.00	0.33	
△型	7.82	2.30	
B型	0.00	0.00	
C型	46.91	0.66	
D型	7.17	0.33	
E型	12.05	0.00	
手型	0.00	0.33	
火山ガラス含有率(重鉱%)	7.94	3.93	
火山ガラス(側)含有率(g)	1.504~1.5153	1.4976~1.4999	
火山ガラス(側)の平均含有率(g)	1.5130	1.4980	
火山ガラスの組成(%)			
重鉱物組成(個数%)			
△型	30	30	
火山ガラスの組成(%)			
重鉱物組成(個数%)			
△型	10	10	

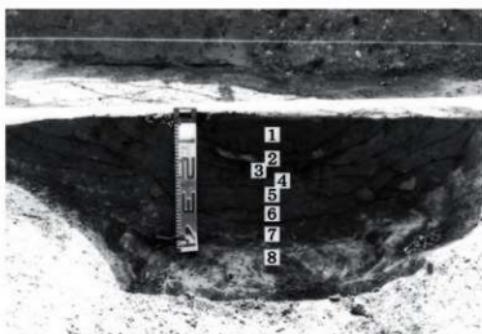
第4表 植現町遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地點・資料						総計
		1	3	5	7	8	9	
イネ科	Gramineae							
ムクナ属 / 蘭の表皮細胞	<i>Oryza sativa</i>	19	13	6	7			
ヨシ属	<i>Herdeom Trifolium</i> (Hesk Phyllanth)	13						
シバ属植物	<i>Polygonum</i> sp.	6	13	6				
キク族	<i>Zostera</i> type							
スズラン科	<i>Panicace</i> type							
ススキ属植物	<i>Miscanthus</i> type	168	84	77	40	15	125	
ウツクサ科	<i>Audouiniae</i> A type	58	91	83	46	8	112	
タケモチ科	<i>Bambusoidae</i>							
メダクソウ科	<i>Polygonata</i> sect. <i>Siponocalamus</i>	39	58	32	7	8	13	
ネコヤナギ属	<i>Polygonata</i> sect. <i>Nearina</i>	155	221	115	106	30	79	
ミヤコヤナギ属	<i>Sasa</i> sect. <i>Crispindii</i>	6			7		7	
マダラケ属	<i>Phyllodoce</i>	6						
未分類属	Others	39	13	6	13	8	7	
その他の属	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	6	13	13	33			
構造上簡便	Rod-shaped	259	234	154	99			
未分類等	Others	162	227	231	185	15	225	
構木起源	Arboresc.							
その他の	Others	19	13	6	13			
構物上細胞数	Total	958	981	737	536	83	628	

タケ系百分比 (%)	オシノリ Pterigonea	ミツバヒメノリ Micromesia	アダマツノリ Pithophora	アマモコロナリ Spirula	カサノリ Crassostrea
ヨシ属 ススキ属	0.57	0.38	0.19	0.19	0.19
スズキ属	0.40	0.45	0.49	0.19	0.19
アマモ科	0.05	0.05	0.37	0.09	0.09
アマモ科 アマモ科	0.15	0.68	0.37	0.14	0.14
ネザサ属 ネザサ属	0.75	1.06	0.55	0.02	0.02
ネザサ属 ネザサ属	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02



SE 1



A 地点



B 地点



上：権現町遺跡全体写真
左：権現町遺跡溝完掘写真
右上：権現町遺跡溝断面写真
右下：出土遺物写真

第Ⅱ部 下北方戸林第2遺跡

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本書で報告する下北方戸林第2遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」に含まれる。下北方遺跡群は宮崎市街地の北西部、大淀川左岸に立地する深年Ⅰ段丘面上に位置する。この段丘面は、宮崎市北西部の垂水台地から南に向かって派生する、宮崎層群を基盤とした丘陵の南端に立地する。現在、丘陵の西側には大淀川が南流し、かつては丘陵の南側を東流する大淀川の旧河道が存在したとされている。また、丘陵各地には大小の開析谷が形成されており、その開析谷を利用した溜池が各地に点在する。深年Ⅰ段丘面は、名田中池として利用される谷を挟んで東西に大きく分かれており、今回調査地はこの谷の西側縁辺部に立地する。

第2節 歴史的環境

下北方丘陵南端部は、周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」の範囲となっている。この地区は宮崎市の中でも遺跡の密度が高い地区として知られており、宅地開発や個人住宅建築等の開発事業に伴う確認調査、本発掘調査が頻繁に実施されている。また、下北方遺跡群の範囲内には県指定史跡「下北方古墳」が所在する。

下北方遺跡群は旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。旧石器時代では、花切第2遺跡や下郷第6遺跡で旧石器時代の砾群と石器集中部が検出されている他、下郷遺跡で剥片尖頭器や角錐状石器を主体とした石器群が出土している。縄文時代では、下郷遺跡で早期の押型文土器、塞ノ神式土器、中期の阿高式系土器等が出土している。弥生時代では、丘陵東端に環濠集落である下郷遺跡が営まれ、弥生時代前期末～終末期にかけて断続的に集落が形成されたことが明らかとなっている。

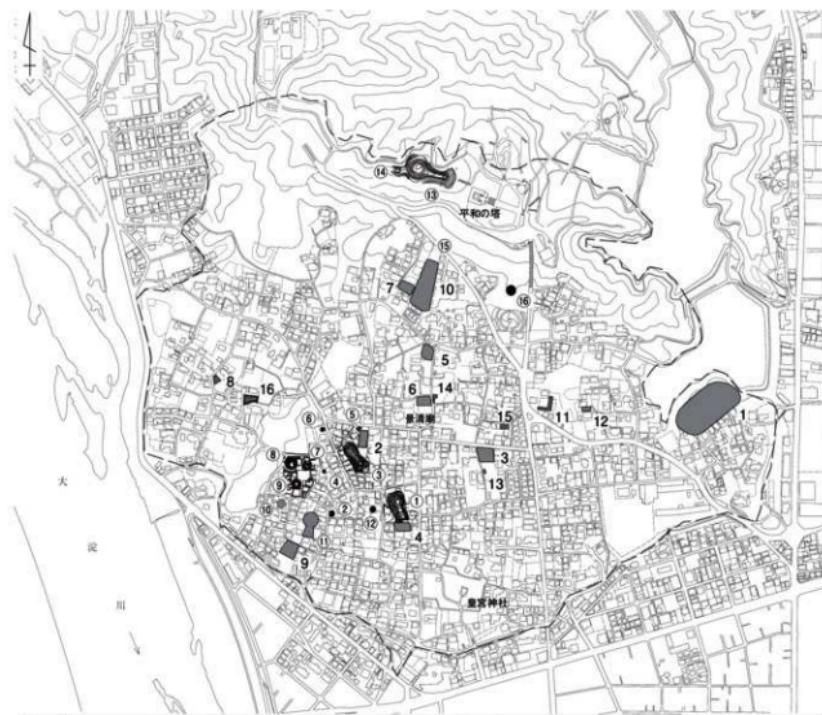
古墳時代には、下北方遺跡群の南西部、塚原地区を中心に下北方古墳が形成される。下北方古墳は中期中葉から築造が開始された古墳群で、大淀川下流域の有力な首長系譜墓の一つとされている。現宮崎神宮境内に所在する船塚古墳を含めた前方後円墳5基、円墳12基が指定を受けている他、地下式横穴墓も25基確認されている。高塚墳については調査事例が少ないが、地下式横穴墓からは宮崎平野部における地下式横穴墓の様相を考える上で貴重な遺物が多数検出されている。特に下北方9号墳に造られた5号地下式横穴墓からは、金製垂飾付耳飾、鉄製甲冑、馬具、石製・ガラス製玉類といった豊富な副葬品が出土しており、地下式横穴墓の被葬者像を考える上で貴重な資料といえる。

奈良・平安時代に入ると、花切第2遺跡で8世紀後半～9世紀初頭の竪穴住居群が多数検出されている。また、塚原第2遺跡では9世紀後半の寺院と考えられる建物が検出されるとともに、素弁八葉蓮華文軒丸瓦や灯明皿といった多数の遺物が検出されている。その他、下郷第4遺跡でも同時期の竪穴住居や掘立柱建物と共にコップ形の須恵器が出土している。

中世の様相は不明瞭であるが、丘陵北側には伊東氏と島津氏の抗争の舞台となった宮崎城が所在する。この城は『日向記』や『土持文書』にみられる建武3年（1336）の記載が文献上の初見で、伊東氏と島津氏の抗争の舞台となった後は江戸時代の一国一城令で廃城となっている。



第7図 下北方遺跡群周辺遺跡分布図



番号	本調査地点名	所在地	主な時代	番号	古墳名	所在地	主な時代
1	下郷遺跡	下北方町下郷	弥生	①	下北方1号墳	下北方町塚原	古墳
2	下北方5号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	②	下北方2号墳	下北方町塚原	古墳
3	塚第4遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	③	下北方3号墳	下北方町塚原	古墳
4	下北方1号墳周辺遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	④	下北方4号墳	下北方町塚原	古墳
5	塚原第1遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	⑤	下北方5号墳	下北方町塚原	古墳
6	塚原第2遺跡	下北方町塚原	古墳・古代	⑥	下北方6号墳	下北方町塚原	古墳
7	花切第1遺跡	下北方町花切	古墳・古代	⑦	下北方7号墳	下北方町塚原	古墳
8	戸林第1遺跡	下北方町戸林	古墳・古代	⑧	下北方8号墳	下北方町塚原	古墳
9	塚原第3遺跡	下北方町塚原	古墳・近世	⑨	下北方9号墳	下北方町塚原	古墳
10	花切第2遺跡	下北方町花切	石器・古墳・古代	⑩	下北方10号墳	下北方町塚原	古墳
11	塚第5遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	⑪	下北方11号墳	下北方町塚原	古墳
12	塚第6遺跡	下北方町下郷	石器・古墳・近世	⑫	下北方12号墳	下北方町塚原	古墳
13	塚第7遺跡	下北方町下郷	古代	⑬	下北方13号墳	下北方町越ヶ追	古墳
14	塚第8遺跡	下北方町下郷	古代	⑭	下北方14号墳	下北方町越ヶ追	古墳
15	塚第9遺跡	下北方町下郷	古墳・古代	⑮	下北方15号墳	下北方町花切	古墳
16	戸林第2遺跡	下北方町戸林	古墳・近世	⑯	下北方16号墳	下北方町高下	古墳

※図中の点線が下北方遺跡群の範囲を示す。

第8図 下北方遺跡群 (S = 1/10000)

近世の下北方地区は延岡藩の飛び地となっており、代官所が現在の大宮中学校付近に所在したといわれている。下北方遺跡群の各所で近世段階の土地改変と考えられる削平や埋め立てが確認されていることから、この地区には代官所を中心とした屋敷地が広がっていた可能性が考えられる。

このように、下北方地区で確認されている各時代の遺構、遺物の様相から、この地区が古くから宮崎平野部の中心的な場所の一つであったことがうかがえる。今後の調査の進展によって、下北方地区の歴史的重要性がさらに明らかになっていくことが期待される。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

令和元年3月27日、不動産売買に伴い民間事業者より下北方町戸林5280番2における埋蔵文化財の有無について、本市文化財課宛てに照会がなされた。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡群」の範囲に含まれることから、令和元年6月25日に事前の確認調査を実施した。調査の結果、事業地内には縄文早期ローム層上位で遺構、遺物が残存していることが明らかとなった。この結果を受けて、文化財課と民間事業者との間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねた結果、宅地の駐車場建設に伴う切土部分70m²について、記録保存を目的とした本発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査の経過

本発掘調査は、令和元年9月17日から令和元年10月8日に実施した。調査はまず重機により表土と遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）を除去し、縄文早期ローム層（Ⅳ層）上面で遺構検出を試み、その後人力による遺構掘削を記録作業と併行して行った。また、Ⅳ層上面での遺構掘削と併行して、縄文時代早期ローム層以下（Ⅳ～Ⅵ層）のトレンチ調査を実施したが、遺物の出土はみられなかった。その後重機による埋め戻しと調査機材の撤収作業を行い、調査を終了した。本発掘調査の総面積は58.5m²となった。発掘調査の延べ日数は11日である。

整理作業は宮崎市埋蔵文化財センターで行い、水洗い、注記、接合作業を令和2年1月14日から3月3日に、実測、トレース作業を令和2年6月1日から9月11日の期間実施した。

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査成果の概要

主な遺構として、古墳時代後期（6世紀後半）の土坑群と、近世期の掘立柱建物、柱穴群、土坑が検出された。なお、遺構検出面であるⅣ層以下から縄文時代早期以前の遺構、遺物は確認されなかった。

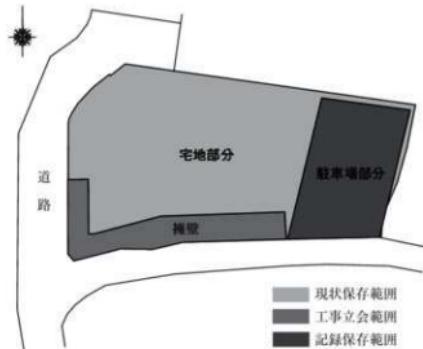
第2節 基本層序

本調査地の基本層序は以下の通りである。IからIV層は調査区西壁の、VからVI層は調査区北壁下層確認トレンチの堆積厚を記している。

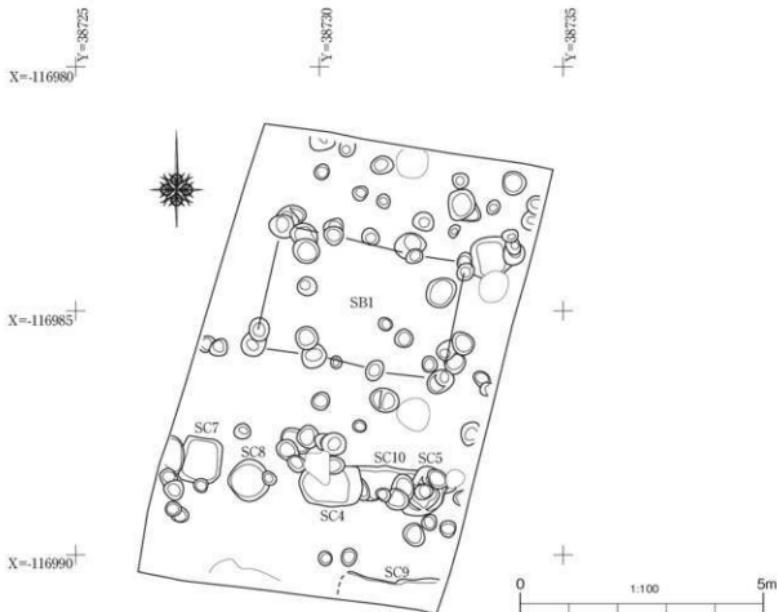
I層（28cm）表土・耕作土。II層（35cm）暗褐色（10YR3/3）。粘性、しまりあり。シルト。



第9図 調査地 ($S = 1/2000$)



第10図 調査範囲図 ($S = 1/400$)



第11図 遺構配置図 ($S = 1/100$)

霧島高原スコリア（Kr-Th）粒子、小蝶、陶磁器片、土師器細片を含む。Ⅲ層（10cm）Ⅱ層とⅣ層がブロック状に混ざる漸移層。Ⅳ層（15cm）褐色（7.5YR4/4）。粘性、しまりあり。ローム。暗褐色硬質ロームブロックを含む。V層（20cm）褐色（7.5YR4/4）。粘性、しまりあり。ローム。霧島小林降下軽石（Kr-Kb）ブロックを多く含む。VI層（20cm以上）暗褐色（7.5YR3/3）。粘性、しまり強い。ローム。クラックが多くV層ロームが入り込む。

第3節 古墳時代の調査成果

IV層上面で、黒褐色シルト及び暗褐色軟質ロームを埋土とする土坑5基が検出された。埋土中からは小片ながら古墳時代後期の遺物が検出された。

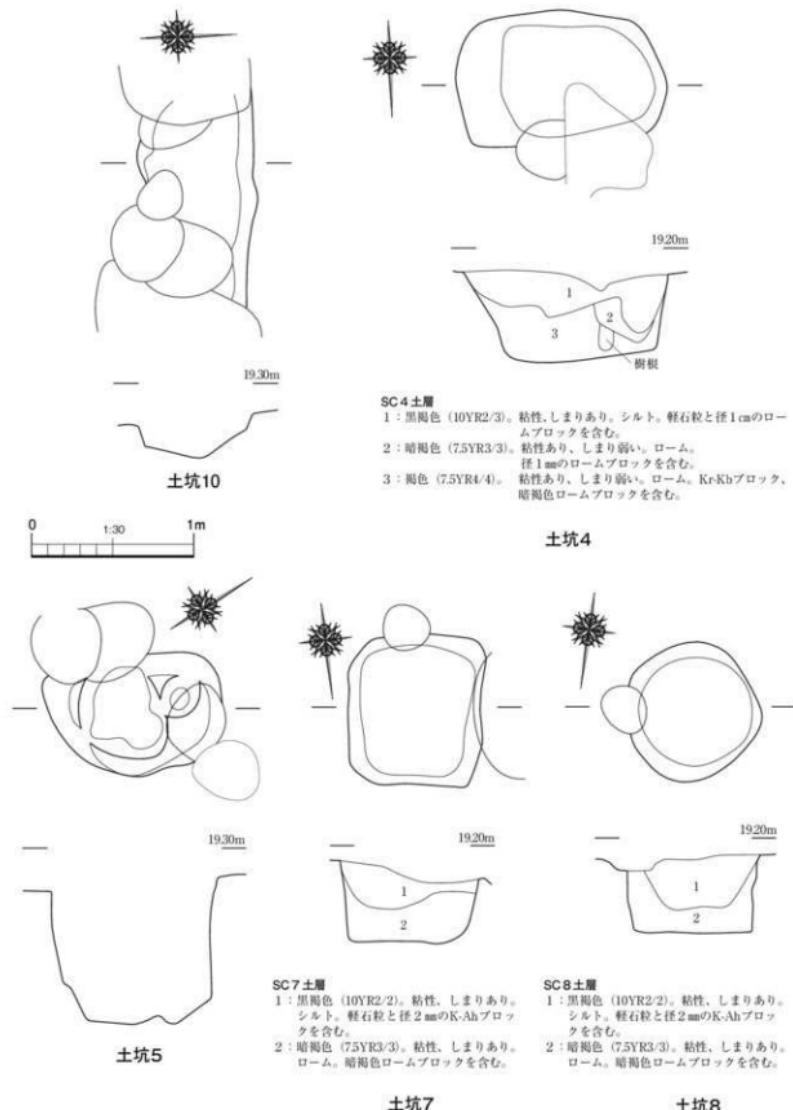
土坑10 土坑4と5に切られており全体形が不明だが、短軸0.72m、長軸1.34m以上、深さ0.25mを測る長方形または隅円方形のプランと考えられる。埋土は暗褐色軟質ロームで、掘削土をそのまま埋め戻したような様相を呈する。図化に耐え得る遺物は出土しなかった。

土坑4 長軸1.3m、短軸0.84mの楕円に近い隅丸方形プランを呈し、深さは0.54mを測る。埋土は1、2層がシルト質土で、3層がローム質土である。堆積がレンズ状を呈さず2層と3層の境が明瞭であることから意図的に埋め戻されたと考えられる。また2・3層上面において小さな凹みが確認できる。柱痕跡の可能性も推測されたが、平面観察で明らかにすることはできなかった。遺物は1層を中心に埋土中から土師器の甕、高坏、須恵器坏が少量出土した。いずれも6世紀後半に位置付けられ、土坑の埋没年代も同時期と判断した。

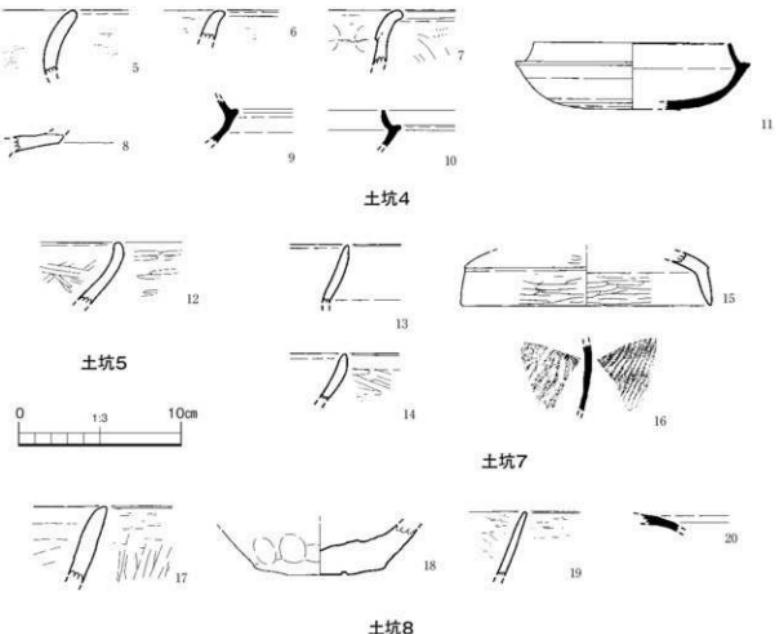
土坑5 捣乱や近世の柱穴に切られており全体形が不明だが、長軸1.1m、短軸0.78mの楕円形プランを呈し、深さは0.9mを測る。埋土は土坑10と類似する暗褐色軟質ロームで、掘削土をそのまま埋め戻したような様相を呈する。底面に凹凸が確認でき、柱状のものを据えた可能性も考えられるが、硬化した様子は認められなかった。遺物は埋土中から土師器片が少量出土し、うち坏1点を図化した。形態から6世紀後半に位置付けられ、土坑の埋没年代も同時期と判断した。

土坑7 近世の柱穴に切られており全体形が不明だが、長軸0.96m、短軸0.82mの略方形プランを呈し、深さ0.5mを測る。埋土は1層がシルト質土で、2層がローム質土である。堆積がレンズ状を呈さず、1層と2層の境が明瞭であることから、意図的に埋め戻されたと考えられる。遺物は埋土中から土師器片と須恵器片が少量出土した。これらのうち模倣壺蓋は形態から6世紀後半に位置付けられ、土坑の埋没年代も同時期と判断した。

土坑8 近世の柱穴に切られているが、径0.88mの円形プランを呈し、深さ0.48mを測る。埋土は1層がシルト質土で、2層がローム質土である。堆積は一見するとレンズ状を呈するが、上部が削平されていることを踏まえると、土坑7のように意図的に埋め戻された可能性が考えられる。遺物は埋土中から土師器片、須恵器片が少量出土した。小片で時期の認定が困難だが、いずれも6世紀後半のものと考えられ、土坑の埋没年代も同時期と判断した。



第12図 古墳時代後期土坑実測図 ($S = 1/30$)



第13図 古墳時代後期土坑出土遺物実測図 (S = 1/3)

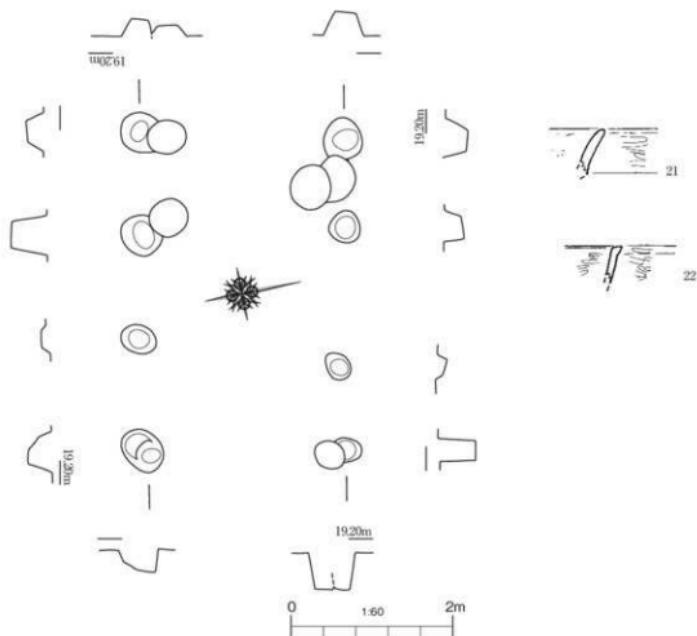
第4節 近世の調査成果

IV層上面で柱穴と土坑が検出された。埋土はいずれもⅡ、Ⅲ層に類似することから、近世期のものと判断された。

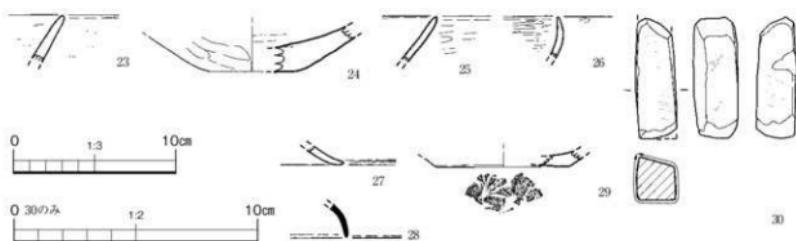
掘立柱建物1 3間×1間の小形の掘立柱建物として認定したが、東西は調査区外に広がる可能性もある。柱間は1mから1.7mであり、小形の位置や作業小屋のような施設の可能性を考えられる。柱穴の深さは不均一である。柱穴内からは土師器小片が出土したが、いずれも混入品と考えられる。

土坑9 調査区南側壁面部分で検出された。調査区外に広がっており、全体形は不明である。また、西側は削平によりプランが不明瞭となっている。底面は西から東に向けて傾斜している。底面は硬化していないが、道路または溝状遺構の可能性も考えられる。埋土中から磁器香炉片が出土した。

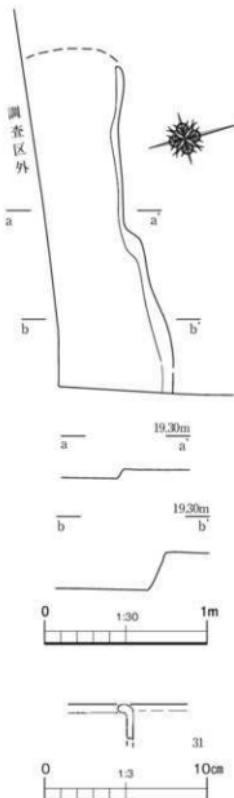
その他の出土遺物 I層からⅢ層にかけて出土した遺物は一括取上げを行った。図化に耐えうるものは少なかったが、古墳時代後期から近世にかけての遺物が出土している。



第14図 捜立柱建物1実測図 ($S = 1/60$)・出土遺物実測図 ($S = 1/3$)



第15図 近世柱穴出土遺物実測図 ($S = 1/3$)



第16図 土坑9実測図 ($S = 1/30$)・
出土物実測図 ($S = 1/3$)



第17図 その他の出土遺物 ($S = 1/3$)

第IV章 総 括

今回調査地では、古墳時代後期と近世の遺構、遺物が検出された。造成により縄文早期ローム層上位の土層は消失していたが、Ⅱ層及びⅢ層が古墳時代後期～近世期の遺物包含層であることから、近世期前後に大規模な造成が行われたと考えられる。

古墳時代後期の土坑群は、遺物の出土も希薄でその機能や用途を明確にしえなかつた。ただし、土坑4、7、8については埋土が明瞭に上下に分層でき、堆積状況が類似していることから、同じような機能を有する土坑群と推測される。

第5表 下北方戸林第2遺跡出土土器観察表

掲載頁 番号	通構等	種別	法量() : 億原	色	調	構成	調査					備考	実測				
							外	内	外	内	地	A	B	C	D	E	
p21 第13回	5	SC4 1層	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	良好	ヨコナデ	ナデ	4 多	1 少				13	
	6	SC4 1層	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR6/4	10YR2/4	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	2 多	1 少	無			15	
	7	SC4 1層	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR2/4	10YR2/4	良好	ナデ	ナデ	4 少	1 少	無			12	
	8	SC4 1層	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	7.5YR6/6	良好	ナデ	ナデ	1 少	1 多	無			14	
	9	SC4 1層	-	-	-	灰 NS1	N6-1	良好	圓板ナデ	圓板ナデ	15						16
	10	SC4 1層	-	-	-	灰 NS1	S6-2	5Y5/1	良好	圓板ナデ	1						18
	11	SC4 1層	(12)	(5.9)	41	灰 S5V1	10Y4/1	良好	圓板ナデ	圓板ナデ	2						17
	12	SC5	-	-	-	褐色 7.5YR7/6	7.5YR7/6	良好	ミガキ	ミガキ	無	無	無				11
	13	SC7 上層	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	7.5YR7/6	良好	ヨコナデ	ナデ	1 多	1 少	少	器表面磨滅		19	
	14	SC7 上層	-	-	-	褐色 7.5YR7/8	5YR7/8	良好	ミガキ	ミガキ	1 少	1 多	無			20	
p22 第14回	15	SC7 上層	(15.4)	-	-	褐色 7.5YR6/6	7.5YR7/6	良好	ミガキ	ミガキ	1			鉢分粒を多く含む		21	
	16	SC7 上層	-	-	-	褐色 7.5YR5/1	5Y5/1	良好	タコナ	タコナ	15						22
	17	SC8 上層	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	10YR2/4	良好	ヨコナデ ミガキと調ナデ	ナデ	1 少	1 多	無			23	
	18	SC8 上層	-	(8.1)	-	にぶい褐色 7.5YR7/6	10YR6/3	良好	指押さえ ナデ	ナデ	5	無		外観面: ハナナ		24	
	19	SC8 上層	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR5/3	7.5YR6/6	良好	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	無	無	無			26	
	20	SC8 上層	-	-	-	褐色 10YR5/1	10YR6/1	良好	圓板ヘラケナデ ナデ	圓板ナデ	2					25	
	21	SH29	-	-	-	褐色 5Y7R4	10YR6/4	良好	ミガキ	ヨコナデ	無	無	無			4	
	22	SH3	-	-	-	明赤褐色 2.5YR5/6	5YR5/6	良好	ミガキ	ミガキ	無			内外面赤色顔料付		9	
	23	SH18	-	-	-	にぶい褐色 7.5YR5/4	2.5YR5/6	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	無	1 少	無			6	
	24	SH62	-	(5.2)	-	にぶい褐色 10YR5/3	2.5Y4/1	良好	ケズリ ナデ	工具痕	1 少	少	少	外観面: ナデ		8	
p22 第15回	25	SH25	-	-	-	褐色 5YR6/6	7.5YR6/6	良好	ヨコナデ後 ナデ	ナデ	2	無				2	
	26	SH48	-	-	-	褐色 5YR6/6	2.5YR6/6	良好	ミガキ	ミガキ	1					7	
	27	SH27	-	-	-	褐色 7.5YR6/6	7.5YR6/6	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	2	無				3	
	28	SH25	-	-	-	褐色 10YR5/1	10YR5/2	良好	圓板ナデ	圓板ナデ	2					1	
	29	SH3	-	(8.1)	-	にぶい褐色 5YR6/4	5YR2/6	良好	圓板ナデ	圓板ナデ	無			赤斑		16	
	31	SC9	-	-	-	明赤褐色 7.5G7/1	2.5G6/1	良好	施釉	施釉						27	
	32	一括	-	-	-	褐色 7.5YR7/6	7.5YR7/6	良好	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	無			鉢分粒を少し含む		34	
	33	一括	-	-	-	褐色 2.5Y6/1	2.5Y7/1	良好	圓板ヘラケナデ ナデ	圓板ナデ	1.5			成時の赤み有		31	
	34	一括	-	-	-	褐色 N3-0	10YR5/1	良好	圓板液状 沈殿	圓板液状 沈殿	2			内外面自然釉付有		32	
p23 第16回	35	一括	11.6	4.6	6	白灰 N8-0	N8-0	良好	施釉	施釉	少			染付文様		28	
	36	一括	-	-	-	2.5Y8/2	2.5Y8/2	不良	施釉	施釉				染付文様		30	
	37	一括	6.85	3.4	5.5	明赤褐色 10YR8-1	7.5G7Y-1	良好	施釉	施釉				染付文様		29	
	38	一括	-	-	-	浅黄褐色 10YR8/4	10YR7/4	良好	ナデ	ナデ				鉢分粒と微細なガラス質斑点を含む		33	

※胎土 A: 宮崎小石 B: 長石、石英 C: 磁石、角閃石 D: 雲母 E: 黒染

第6表 下北方戸林第2遺跡出土土器観察表

掲載頁	図番号	掲載番号	通構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	備考	実測 No.
p22 第15回	30	SH29	砾石	凝灰岩	4.95	1.95	1.75	2.12	拘束有		5

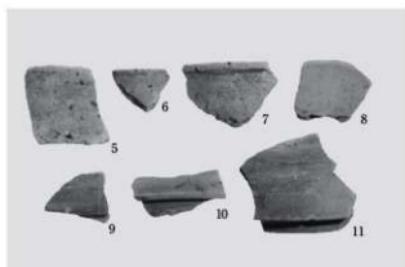
図版2



調査区西壁土層堆積状況



土坑4 土層断面（北から）



土坑4 出土遺物

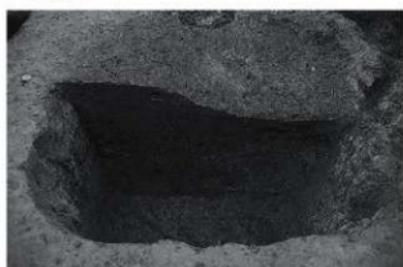


土坑5, 10 完掘状況（東から）

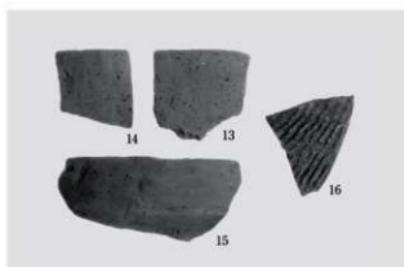


土坑5 出土遺物

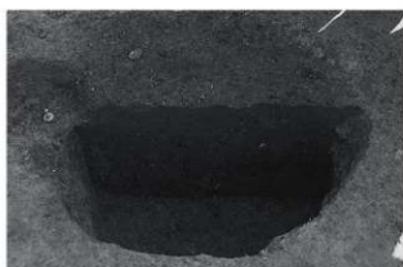
図版3



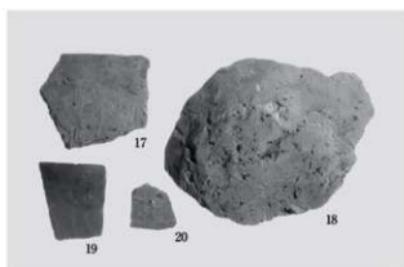
土坑7 土層断面（北から）



土坑7 出土遺物



土坑8 土層断面（北から）

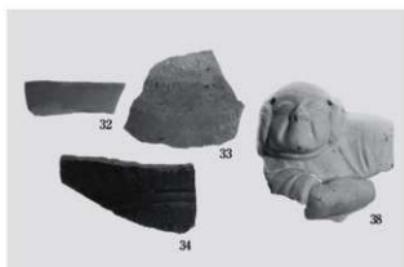
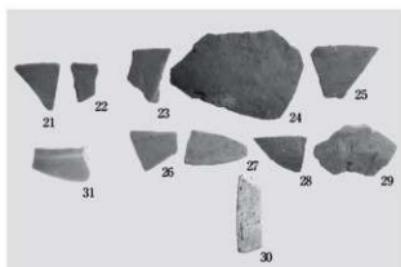


土坑8 出土遺物



土坑群完掘状況（西から）

図版4



上段：調査区北側完掘状況（西から）、中段：調査区南側完掘状況（西から）

下段左：近世遺構出土遺物、下段右：その他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ごんげんちょういせき・しもきたかたとばやしだいにいせき					
書名	権現町遺跡・下北方戸林第2遺跡					
副書名	平成27・令和元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金対象事業発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第139集					
編著者名	金丸 武司 河野 裕次					
発行機関	宮崎市教育委員会					
所在地	〒889-1696 宮崎市清武町西新町1番地1（清武総合支所3階）TEL：0985-85-1178					
発行年月日	2021年10月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積
ごんげんちょういせき 権現町遺跡	宮崎市浮城町 15-1, 15-7	45201 21-062	31° 55'50"	131° 24'12"	20160308 → 20160328	134m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考	
共同住宅建築	散布地	古代以前	掘立柱建物			
		古代～中世	溝状遺構	須恵器、陶器		
特記事項	溝状遺構は、古代から中世にかけて利用された道路と考えられる。					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積
しもきたかたいせきぐん 下北方遺跡群	宮崎市 下北方町 5280番2	45201 21-079	31° 56'39"	131° 24'34"	20190917 → 20191008	70m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考	
個人住宅建築	散布地 集落 社寺 古墳	古墳時代後期	土坑	土師器 須恵器		
		近世	掘立柱建物	陶磁器 土人形 砥石		
特記事項	古墳時代後期の土坑群と、近世期の掘立柱建物を検出。					

宮崎市文化財調査報告書 第139集

権現町遺跡・下北方戸林第2遺跡

平成27・令和元年度国宝重要文化財等保存整備費補助金
対象事業発掘調査報告書

2021年10月

発行 宮崎市教育委員会

